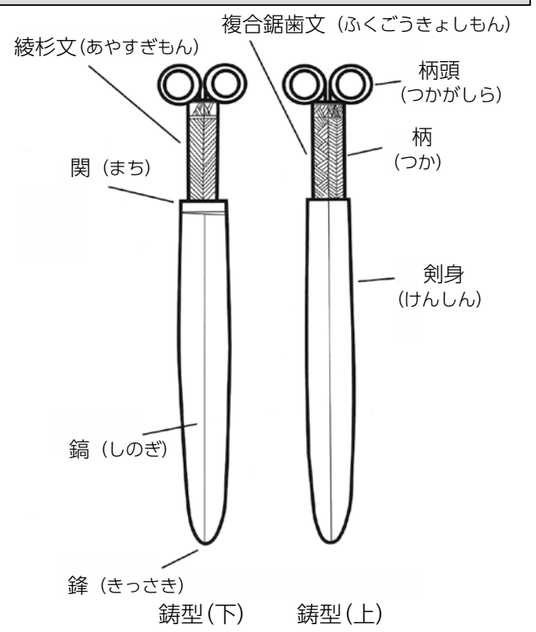
国内に出土例ない短剣鋳型

6月6日（木）、上御殿遺跡の発掘調査現場で、石製鋳型が発見されました。発見された鋳型は上下2枚が出土し、いずれも長さが約29・5㎝、幅が約8・8㎝のやや膨らみのある長方形で、厚さはそれぞれ約4・4㎝（下）と3・6㎝（上）、剣が彫られた面を合わせた状態で発見されました。周辺の遺構の状況や鋳型に彫られた剣の文様などから、今から約2350～1700年前の弥生時代から古墳時代にかけてのものと考えられます。この鋳型から造られる短剣は、全長が約28・5㎝、柄と剣身が一体で、柄頭（つかがしら）に双環があるなど中国北方で使われていた「オルドス式銅剣」に似た特徴を持っています。しかし、オルドス式にある鍔（つば）がなく、柄に国内の銅鐸に多い幾何学（きかがく）模様が取り入れられているなど違いも多いことから、オルドス式銅剣をモデルに国内で作られたものと考えられます。

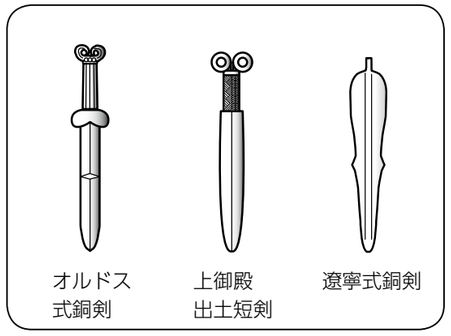
また、この鋳型の上下を合わせてみると、鋳型に彫りこまれた短剣の柄の長さが上下で異なることから、未完成または失敗品の可能性があるとともに、実際に鋳造された痕跡も無いことから、鋳型としての完成品だとすれば、なぜ鋳込まなかったのか謎が残ります。

鋳型と模造短剣

復元短剣模式図と短剣部位の名称



（公）滋賀県文化財保護協会「上御殿遺跡発掘調査現地説明会資料」より



現地説明会

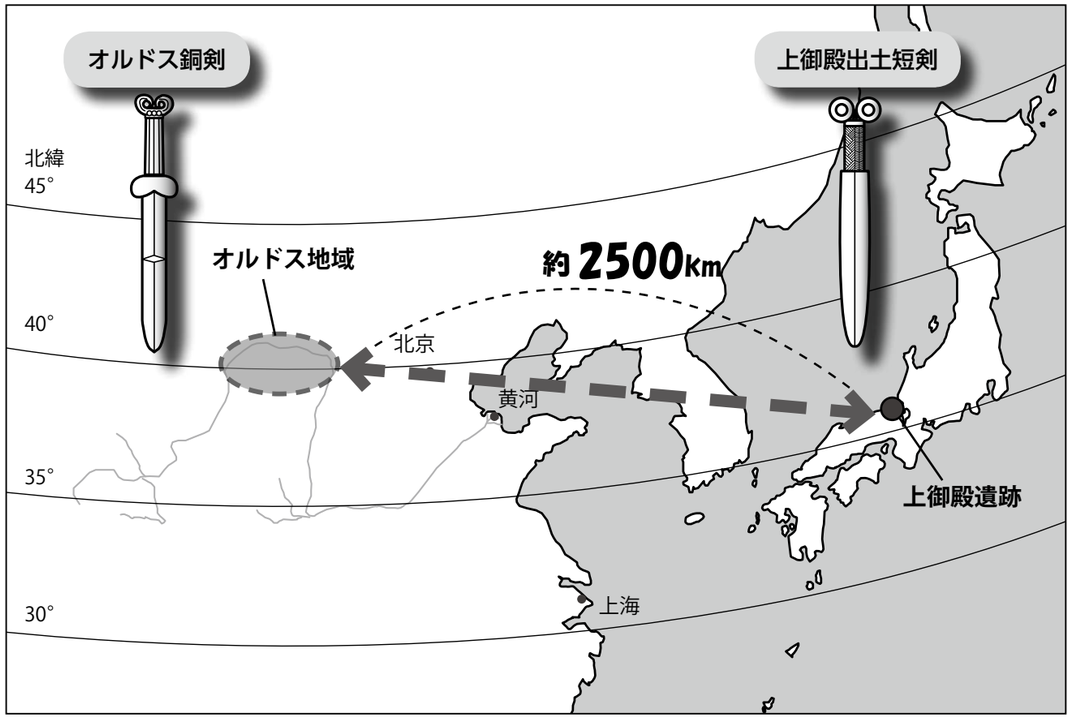
8月11日（日）に行われた上御殿遺跡発掘調査現地説明会には、市内外から関心のある方がたくさん来られ、熱心に説明を聞いておられました。

出土遺物の見学

現地説明

出土地点での説明

東北アジアにおけるオルドス地域と上御殿遺跡



古代史の定説を覆す!?

これまで国内で発見されてきた銅剣は、朝鮮半島を通じて伝わったと見られる「遼寧（りょうねい）式銅剣（中国東北部）」等をモデルとする銅剣です。しかし今回発見された鋳型は、中国北方地域の華北地方や内モンゴルに分布する「オルドス式銅剣」の特徴を持つもので、このタイプの銅剣は、国内のみならず朝鮮半島にも出土例がありません。

これまで日本への青銅器文化の流入は、中国から朝鮮半島を経由して九州北部にもたらされたという説が定説化していました。しかし、今回上御殿遺跡から発見された鋳型の出土によって、日本海を経て直接もたらされたという新ルートも視野に入れて考える必要が出てきました。

そうしたことから、上御殿遺跡出土の「双環柄頭短剣鋳型」は、日本の考古学研究者の注目を大いに浴びており、今後は研究等が進展することによってその評価が定まり、同遺跡の重要性が説かれるのを、私たちは待ちたいと思います。

出土地を調査する研究者

鴨稲荷山古墳以来の大発見

明治35年（1902年）8月9日、宿鴨集落の北に位置する鴨稲荷山古墳（当時は稲荷塚）横の、やはり県道改修工事に伴う工事で、墳丘内より家形石棺が発見され、内部の検分により金銅製の豪華な装身具が出土し、大きな話題となりました。上御殿遺跡出土の「双環柄頭短剣鋳型」は、それ以来の大発見になるもようです。

問 高島歴史民俗資料館
☎（36）1553